

# “アイプチ”を手放せない女たち

人間生活学科 生活専攻 トータルメイクコース 玉置育子

## Women Who Can't Give Up “EYE PUTTI”

Yasuko TAMAKI

### はじめに

「普段アイプチしている子って、アイプチして無い時ってホント元気ないよ。」と、ある学生がマジメな顔をして私に近寄って来てそう囁いた。その話をより詳しく聞くとこういうことだった。「普段からアイプチをずっとし続けていると、どれだけお化粧を濃くしていても、バッチリお化粧をしていても伏し目がちで何だか元気が無い様子を漂わせる。しかし、スッピン（素顔）であってもアイプチをしていれば、伏し目がちではなく、元気が無いという雰囲気を漂わせることは無い」ということだ。

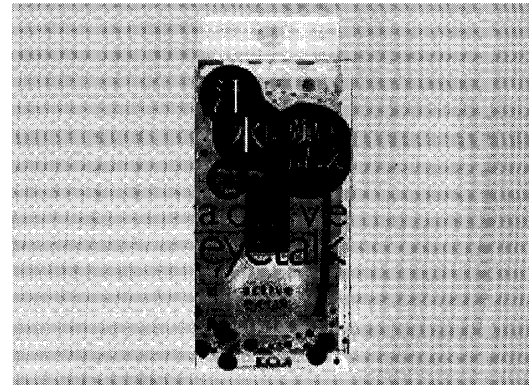
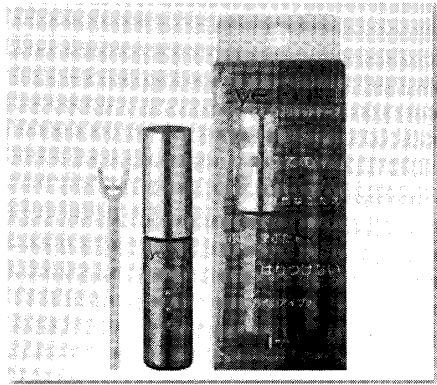
ところで、“アイプチ”とは一体何だろうか？ここで確認しておきたい。ここで指し示している“アイプチ”とはまぶたを二重にするための化粧品のことである。“アイプチ”本体には糊のような液体が入っており、その液体を睫毛のすぐ上あたりの瞼につけ、瞼と瞼を接着させ二重まぶたを作る。しかし、アイプチという名前はイミュ株式会社の登録商標であり、その会社から発売されている「OPERA」というブランドの二重まぶた化粧品のことのみを示している。したがって、会社が異なれば“二重まぶた用化粧品”の呼び名も当然変化する。コージー本舗から発売されている二重まぶた用化粧品は「アクティブ アイトーク」、「ナチュラル アイトーク」と名づけられており、エリザベス化粧品から発売されている二重まぶた用化粧品には「エリザベスアイリッド」、「キューティー・キューティー」などという商品名である。(図①)

しかし、二重まぶた用化粧品は呼び名が変わっても、使用方法はそれほど異なることはない。コージー本舗のホームページではアイトークの使用方法が次の通り述べられていたので紹介しておきたい。(図②)

「アイトーク」を塗る前に、まぶたの上の脂分をコットンなどでよくふき取り、ふたえのラインを決めてください(※)。「アイトーク」はムラなく、薄く均等に塗り、塗った部分が半透明になったら付属のプッシャーで押さえながらそっと目を開け、ふたえのラインを深く折り込むようにして、目頭から目尻をプッシャーでキレイに整えます(左の写真)。

※ まつ毛の生え際から4～6mmほど上にふたえのラインがくるようにすると自然です。

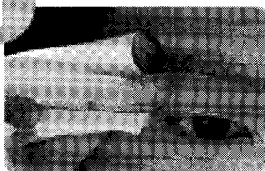
以上の通り、まるで目の上の皮膚を紙と紙を糊で接着させる工作のような感覚で整えていき、



図① 様々な二重まぶた用化粧品

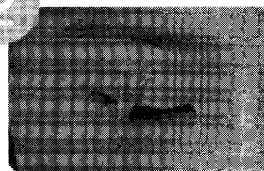
左上：アイプチ 右上：エリザベスアイリッド  
 左下：アイトーク 右下：アクティブアイトーク

1



はじめに、まぶたの上の脂分をコットンでよくふきとって

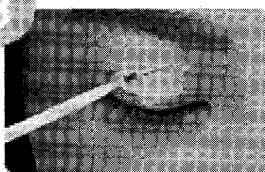
2



プッシャーでまぶたを軽く押さえて、ふたえのラインを決めてね。

**Point 1** まつげの生え際から4~6ミリ上のふたえのラインがくると自然

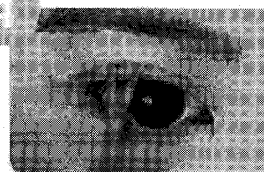
3



目を閉じて、ふたえのラインがほぼ中央にくるように、4~6ミリ幅の楕円にアイトークをぬってね。

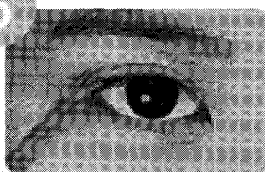
**Point 2** むらなく、うすくぬるのがコツ！

4



待つこと約2分、ぬった部分が白から半透明になったら、プッシャーで押さえながら、そっと目を開けてみて。

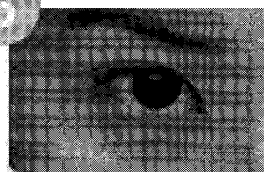
5



ふたえのラインを深く折り込むように、プッシャーで目頭から目尻をキレイに整えてね。

**Point 3** プッシャーは目尻方向にラインをひくようにねかせながらはずすのがコツ。

6



パッチリふたえのできあがり！これであなたも、アイトークの達人ねっ!! 3・4回練習すると、もっと上手にふたえがつけられるようになるよ

図② 二重まぶたの作り方

“アイプチ”を手放せない女たち（玉置育子）

二重まぶたを完成させてゆく。

こんな作業を想像以上の多くの女性が自分のまぶたに施しているという。そこで、本論では“二重まぶた”の目を手に入れようと奔走している女性達にインタビューを行い、アイプチを手放せなくなった彼女達の思いを語ってもらうこととした。

二重まぶた用化粧品の総称はアイプチが最も一般的であるため本論の表題でも使用した。

## 第一章 アイプチに翻弄される女性達（女子学生・6名・18, 19歳）

私は多くの方より二重まぶた用化粧品の体験談を聞いたかったため、私が担当している受講生50名の授業で「アイプチの文化論を研究したいので、アイプチに興味がある人、アイプチ使用者の方がいればお話を聞かせてください。」といったところ授業終了後、6人の学生が私の元にやってきてくれた。

早速その場で二重まぶた用化粧品にまつわる話をしてもらった。

・二重まぶた用化粧品をしてみたい学生。

彼女は二重まぶた用化粧品を使用していないが興味はあるという。興味はあるけど何か使い切れないという。その理由を彼女は次のように語ってくれた。「だって、普段は一重なので突然二重になってしまうと自分で自分の顔にビックリしてしまう。」という。普段見慣れた顔が一番落ちつく。そんな理由でアイプチを使用しないとのことだった。

・アイプチ卒業者

高校二、三年生の二年間、毎日二重まぶた用化粧品を使用しつづけた。その結果、二重まぶた用化粧品を使用しなくても二重まぶたになったという。現在も二重まぶたになったままで、糊などで接着させる必要すらないという。彼女は二重まぶた用化粧品使用時には常に“目頭”に塗りつけていた。どの部分に塗ればよりきれいな二重まぶたになるか、そして、その二重まぶたの型が二重まぶた用化粧品を使用しなくてもずっと続くかは個人差がある。まぶたのどの位置への“糊”の塗布がより美しい二重を形成させるかを知ることも二重まぶた用化粧品を使用する際の重要なポイントとなっている。

・伸びるまぶた

彼女は二重まぶた用化粧品を使用することによって、永遠の二重まぶたを手に入れることができたが、未だに二重まぶた用化粧品が手放せないという。なぜなら、毎日二重まぶたを糊で接着させていたら伸びてしまったまぶたが垂れ下がり視野を狭くするという。だから、まぶたを引き上げるため彼女は日々二重まぶた用化粧品でまぶたを引き上げておかなければならない。二重まぶたを形成する為の化粧品というよりもまぶたを引き上げておくための接着剤といったほうが的確かもしれない。

・皺が増えるまぶた

この学生は二重まぶた用化粧品を卒業したというよりも、志半ばにして断念したといった方が適切かもしれない。彼女は二重まぶた用化粧品を使用してみたが柔らかいまぶたに幾重にも皺が

入り、二重どころか三重、四重のまぶたになってしまいどの皺に合わせて二重まぶたを形成すれば良いのかわからなくなりアイプチの使用を諦めたという。しかし、本来のまぶたは一重まぶたであるため幾重にも重なっていたまぶたは、二重まぶた用化粧品の使用を止めるとすぐに消え、現在は一重まぶたで生活をしている。彼女にとって“皺”の多いまぶたで生活するよりも、一重まぶたで生活する方が楽だという。

#### ・重力とまぶた

二重まぶたを“習得”すべく彼女も二重まぶた用化粧品の毎日まぶたに塗り続けていた。

その甲斐あって1, 2ヶ月すると自然に二重まぶたになっており相当喜んだ。しかし、その喜びは一瞬で消え失せた。なぜなら、彼女が自分のまぶたを確認したのは布団の中で横になったまま鏡を覗いたからだ。起き上がって再度鏡を覗くと重力に逆らえず一瞬で一重まぶたに戻ってしまった。彼女曰く、「重力に耐えうるまぶたを手に入れるのは遠い道のりがある。」彼女は今も重力に負けない二重まぶたを手に入れるべく、二重まぶた用化粧品の使用を続けている。

#### ・生活態度とアイプチ

この学生は高校時代に吹奏学部所属していた時、顧問から部員全員に対して「アイプチについて考えろ!」といわれてミーティングを持った機会があったという。顧問の言い分としては、アイプチ(=二重まぶた用化粧品)をすることによって生活態度が乱れてしまう。だから、アイプチをすることの意味を皆で考えろ!ということだったらしい。その結果として吹奏楽部の部員でミーティングをし、出した結論が「程度を考えて、先生にばれないように」ということだったそうだ。“程度”, “先生にばれない”という抽象的な答えだが、ある一つの結論を導きだしたため、それで部内は落ち着きを取り戻したらしいが、二重まぶた使用者の様子は何も変わってないとのことだった。

さて、インタビューを通じて二重まぶた用化粧品使用者の全ての人の意見が一致したことが幾つかあったので確認しておきたい。

まずは、二重まぶた用化粧品はその場しのぎで二重を作っているのではなく、二重まぶた用化粧品を使用し続けることで、いずれは二重まぶたを手に入れるための日々の訓練なのだという。

そして、二重まぶた用化粧品によって型が付いて二重になるかどうかは、相当個人差があり、彼女達もそのことは承知していた。自分のまぶたが、すぐに型が付くかどうかは二重まぶた用化粧品を実際に使用してみないとわからないという。数ヶ月の使用で二重の型が付いた人はラッキー、二重の型が付かない人はこれからも毎日頑張りましょうと、明暗が別れる。

次に、彼女達は「目つきが悪い」、「人を睨んでいるみたい」と言って一重まぶたをすごく嫌う。そんな一重まぶたの八つ当たりの矛先は自分のまぶたに向うのではなく、親に向いたのであった。学生達は個々に「お父さんは二重なのに、お母さんは一重。私はお母さんの目が遺伝した」とか、「兄弟はみんな二重なのに、お母さんの一重だけが私に遺伝した」などという。自分の一重を嘆くのではなく、親の目元が一重だったことに嘆き、それが遺伝した不運な身の上を嘆くのだ。互いを確認しあうように「私も」、「私も」と一重まぶたの学生達は慰めあっていた。

私が各学生に話を聞いている傍らで、学生たちは自分が使っている二重まぶた用化粧品について

“アイプチ”を手放せない女たち（玉置育子）

ての情報交換を行っていた。「何使っている？」と聞けば、即座に鞆から自分の愛用品が出てくる。「コレ（コージー本舗発売のイトーク）いいよ」とある学生が言うと、「それって水に弱くない」と質問を投げかける。他の学生が自分の愛用品を取り出し「これウォータープルーフでいいよ。汗かいても大丈夫」と言う。リズムカルに会話は交わされ、凄い勢いで情報は交換されていった。そして、その場は即座に二重まぶた用化粧品のお試し会場となった。そんな彼女達が二重まぶた用化粧品を選ぶ際の基準は次の通りだった。まずは、安すぎないこと。500円以下のものなどもあるらしいが、安すぎると粗悪品だと言い切る。彼女達の指し示す粗悪品とは、粘着力が弱いこと、糊の跡が白く残ることである。そして、二重まぶた用化粧品を使用するにあたって何より重要視していることは、乾けば透明になることであった。二重まぶた用化粧品をまぶたに塗布した後、跡が白く残ってしまうと、瞬きした際に他人から目に付いてしまいみっともないのだ。

その他に、糊ではなくまぶたに直接貼り付ける二重まぶた矯正用のテープもある。こちらの方が効果は高いが、テープがずれたりするため学生達はあまりお勧めではなかった。二重まぶたにするための一番有効な方法として、家ではまぶたにテープを貼り付け、外出時には糊を使用する学生なども居た。

さらに、二重まぶた用化粧品の使用についての注意も語ってくれた。まぶたを引っ張り上げすぎて、まぶたの裏の粘膜が外から見てもわかる人をたまに見かけるらしい。それは見ていて気持ち悪いのでまぶたを引っ張り上げすぎるといけない。“適度にまぶた引き上げ”，“自然な二重”が彼女たちの目指す“二重まぶた”だそうだ。

殆どの学生が二重まぶたに対してコンプレックスを持ち、二重まぶたを作るべく悪戦苦闘し始めるのが高校生時代からだった。高校1年生から二重まぶた用化粧品を使用する人もいるが、多くの学生達は部活引退後に使用し始めるという。彼女達は口々にこんなことを言っていた。「もっと、早くからアイプチを使用していたら二重になっていたかなあ。」と。まるで青い鳥を追いかけている姿を見ているようだった。

## 第二章 アイプチ無しで生きてゆけない女性（Sさん・21歳・学生）

彼女は二重まぶた用化粧品無しでは生きてゆけない。アイプチ・ジャンキーといっても過言ではないほど二重まぶた化粧品への依存度は高い。朝起きれば先ず目を二重にする。コンビニに行く時でさえも忘れることはない。外出時にアイプチ無しで出かけることは絶対にないと言い切る。家に家族だけしか居ない時でもできる限り目を二重にしている。その理由は家族も一重の目よりも二重の方がイイと彼女に言うからだ。

そもそも彼女が目を二重にし始めたのは高校一年生の時にまで遡る。高校入学後に友人達と一緒に化粧を始めたのがきっかけだった。ある日、一つの鏡を友人と一緒に覗きこみながら化粧をした。その時に自分の顔が“一重”で“他人より目が小さく”，“目つきが悪い”ことに気づいた。中学時代に化粧をすることが無かったし、人の顔と自分の顔を比べることさえなかったという。

しかし、高校入学後、化粧をするようになって鏡を頻繁に覗くようになりその度に自分の目が人より“小さい”ことがコンプレックスとなり、せめて少しだけでも目を大きくしたいという思いから二重まぶた用化粧品を使用し現在に至る。

二重まぶた用化粧品をし始めた当初は、糊で引っ張られるまぶたに違和感を感じたり、まぶたが糊で被れて赤く腫れ上がったという。しかし、「この痛みはすぐに慣れる」、「耐えられる」と自分に言い聞かせ続けたという。二重まぶた用化粧品を使用することで人並みの目の大きさが手に入り、目つきも悪くは無いと自分で思えるようになり、自分の中でも気持ちの持ち方が全然違うことに気づいた。二重まぶた用化粧品を使用して目が大きくなると元気が出る、と彼女は言い切る。

日々の生活の中で二重まぶた用化粧品の使用にあたって最新の注意を払っていることがある。それは、自分の顔の上に水分を寄せ付けないようにしていることだ。

彼女が使用している二重まぶた用化粧品は水に弱く、水に濡れるとまぶたの糊の粘着力が落ち、二重に形成しているまぶたが取れて一重に戻ってしまうのだという。しかし、ウォータープルーフの絶対に取りれない他の製品の使用は検討していないという。使い慣れた粘着力が心地よいらしい。

高校時代から二重まぶた用化粧品を使用している彼女にこんな質問をしてみた「高校時代の水泳は？」と。「高校時代に水泳の授業は無かった」とのこと。もし水泳の授業があってもおそらく水泳の授業はサボっていたという。クラスメイトの前でも“一重の自分”を晒すことは許されないのだ。

彼女の日常生活の水への注意は、水泳だけにとどまらない。自分の汗、涙、突然の通り雨も彼女にとっては恐怖の水だ。不意に襲われた水で一重のまぶたの顔を他人に見られる恐怖に襲われるという。そんな時は泣きたい気持ちにもなるが、自分で流す涙も二重まぶた用化粧品が取れてしまうおそれがあり、涙を流すことさえ許されない。冷や汗もかいている場合ではないという。

しかし、そんな水に怯えながら生活していても二重まぶた用化粧品を手放すことは考えていないという。また、彼女は二重まぶた用化粧品を使用する理由は、毎日二重まぶたを形成するためと、自分のまぶたに二重の形状を記憶させ永遠の二重を手に入れるためであるという。

最後に彼女にこんな質問してみた。「アイプチをしなくなる時ってどんな時？」

「プチ整形をして、二重になったら」と答えが返ってきた。

「今はお金がないけどお金ができれば絶対プチ整形をして二重を手に入れる。」と、今までのインタビュー中で一番力強い言葉だった。その言葉は新たな人生を踏み出す決意表明にも似た感じを受けた。

### 第三章 アイプチを卒業した女性（Eさん・23歳・介護福祉士）

彼女が二重まぶた用化粧品を使用し始めたのは高校一年生の時からである。高校生活で二重にするのが流行ったからと友達と一緒に目を二重にし始めた。目を二重にし始めた当初はスティッ

“アイプチ”を手放せない女たち（玉置育子）

ク糊を直接まぶたに塗り、その粘着力を使用して二重まぶたを作っていたという。しかし、スティック糊では粘着力が弱く徐々に粘着力の強いものを探し求めるようになり二重まぶた用化粧品を使用するようになった。

二重まぶた用化粧品が学校で流行し始めてから“二重まぶたがイイ”という考えが蔓延し、また自分の顔も一重よりも“二重の方がイイ”と思うようになったのである。一重まぶたの時の目つきが悪い自分の顔よりも、明らかにパッチリとした目の方がいいと思ひ込み始めたのであった。今でも一重まぶただった頃の自分の顔を“キツイ顔”と形容する。

高校時代は二重まぶた用化粧品無しで生活することなどは考えられなかったと断言する。

Eさんも使用していた二重まぶた用化粧品は、先述のSさんと同様、水に弱かった。高校時代、彼女は必死に汗を拭い、涙を流さないように努力をしながら生活していたと振り返る。二重まぶた用化粧品の使用時に最も苦労したことが修学旅行での入浴であったという。

入浴時のお湯に耐えうるまぶたを準備するため、入浴前に二重まぶた用化粧品を再度付け直したという。そして、入浴時は二重まぶた用化粧品がお湯に持ちこたえることができるかということのみに気を配り、微動だにせず湯につかっていたという。一度、二重まぶた用化粧品を使用した者にとっては公衆の面前で一重の目に戻ってしまうのは許されない行為なのだ。

Eさんには他にもこんなエピソードがある。授業中に瞬きを何度もしているうちに二重まぶた用化粧品の糊が取れてしまい、一重まぶたになってしまったことがある。授業中にクラスメイトの一人が一重まぶたに戻ったとしても多くの生徒はおそらく気にならないだろうし、クラス内では大問題にはならない。しかし、一重まぶたに戻ってしまった彼女にとっては大問題だ。授業どころではなくなり、そんな時は「先生、トイレ!!」といってトイレに駆け込み、そこで二重まぶたの“修理”をするのだ。とにかく、“一重まぶたで人前に居てはいけない”という強い思いは強迫観念といっても言い過ぎではないだろう。

そんな彼女が二重まぶた用化粧品から開放されたのは20歳の時だ。彼女が二重まぶた用化粧品を手放せたのは、プチ整形によって二重を手に入れたからである。彼女は自分自身のプチ整形を「アイプチからの開放」と言う。20歳以上ならプチ整形を行う際に親の承諾を得なくても良いため、彼女はとにかく20歳になることが待ち遠しかったという。

今となっては高校時代から20歳までのアイプチを手放せなかった時の苦労や苦悩は忘れた、とさえ笑って言っている。

プチ整形の値段は友人からの紹介ということもあって58,000円から60,000円くらいだったらしい。彼女のプチ整形は目頭と目じりを糸でくくるタイプのもので所要時間は約15分程度だったという。まぶたを糸でくくる痛みよりも麻酔注射の方が痛かったと振り返る。人によっては麻酔注射で目が腫れ上がったりすることもあるらしい。彼女の場合は目は少し腫れたが、麻酔注射をすると多少の腫れを伴うことがあるらしいという情報を得ていたためそれほど気にしなかったとのことだ。

彼女にとって20歳になるということは整形をするために親の承諾を得なくて言い年齢という認識の方が強いという。そして、プチ整形をすることによって大人の仲間入りをした通過儀礼的要

素もあるのかというと、そうでもない。

彼女はこの言葉を言い続けていた。「20歳はアイプチからの開放」

## さいごに

私が先日招待された結婚式の写真を学生達に見せた。彼女達はまずドレスに興味を示す。次は化粧。どんな化粧をしているか新婦の顔を見た瞬間、一斉に「この花嫁さんアイプチでしょ。」と写真を覗きこんでいた学生が叫んだ。それだけ学生達にとって他人の顔をチェックする時に二重まぶた用化粧品をしているかどうか気になるようだ。それだけ、二重まぶた用化粧品への依存度が高いことを知ることができよう。

今回はインタビューという形で3例の二重まぶた用化粧品にまつわる話を聞いた。

特に第二章、第三章の二人の話を聞きながら、男性のカツラ使用者との話が重なることが多く、関西テレビのアナウンサーでカツラ着用していた経験を持つ山本浩之氏の講演を聞きに行ったときの話は私は度々思い出した。

現在の山本氏はカツラを使用していない。山本氏は「もっと自然にというか、自分なりに仕事もプライベートも、もっと楽しく過ごせたらなあ」と言う思いから、深夜番組で「私、ハゲだったんです。」とやってカツラを脱いだのだった。講演ではカツラを使用していた当時を振り返り、カツラを使用に際しての涙ぐましいまでの努力を面白おかしく語っていた。

まず、山本氏は関西テレビのアナウンサーという職業であるにも関わらず台風中継の仕事はできなかったという。もちろん、カツラが吹っ飛んでしまう恐れがあるからだ。カツラを使用している際の不都合は仕事ばかりではない。山本氏が子どもを連れて遊園地に行った時にも気を使うことが多かったと言う。一番困るのは子どもが「お父さん、ジェットコースターに乗ろう！」と言い出すことだ。子どもがどうしてもジェットコースターに乗りたいと駄々をこねた時は「お父さんは高いところ嫌い」と、微妙な嘘でごまかしていた。もちろんカツラが飛ばないために子どもにまで嘘をつくのだ。他にもこんなエピソードがある。ゴルフ場ではTPOに合わせてカツラの着脱を行っていたため一人だけ行動が違っていただろしい。例えば、ゴルフを一緒に廻る時は帽子を被るためカツラは外してロッカーにしまっておくそうだ。コースでは風に帽子が飛ばされないか常に風向きを確認しながらゴルフをした。ゴルフ終了後の風呂では、全ての衣類は脱ぐが、カツラは着用し、頭部の蒸れを我慢しながら入浴しなければならなかった。とにかく頭部への配慮は並々ならぬものであった様子が講演から伝わってきた。

この涙ぐましいまでの努力に誰も気づくことはないが、本人は必死である。カツラがばれないために。

二重まぶた用化粧品を使用している彼女達も、一重のままの自分の顔が人目で晒されない為に必死である。まぶたが被れたり、赤く腫れ上がったたりしても、耐え続けようとする。二重まぶたのために。

その惜しみない努力は他者に伝わるものではないし、他者が介入してその努力を止めることも



“アイプチ”を手放せない女たち（玉置育子）

できない。アイプチを手放せない女性達は、先述の山本氏がカツラを脱いだ時のエピソードのように“自然になる”という言葉はまるで当てはまらない。その様子はハムスターが運動するために使用する回転式の車輪のごとく、一度その中に入ってしまうばいつまでも走り続けなければならぬのだろうか、そんな気さえしてしまう。

しかし、第一章でのインタビューの通り一度二重まぶた用化粧品を手にしたものの、使用を継続させなかった人、“アイプチ”を手放した人が居たことも否めない。これらをふまえて本論を振り返ると、このインタビューのなかに化粧文化的視座に立った上で今後の課題が山積していることは言うまでもない。日本において二重の目が“イイ”とされるようになった時代背景、アイデンティティーの問題、自己の身体論、アイプチなどの二重まぶた用化粧の歴史など研究課題は尽きない。

本論を再検討し論文という形で再度報告したい。